過ぎたれど去らぬ日々

わが少女期の日記抄

寿岳章

寿岳章子（じゅがくあきこ）

1924年生
京都府立大学教授
著書 『日本語と女』（岩波書店，1979年）
『國語表現法概説』（共著，有精堂出版，1968年）
『日本語の裏方』（講談社，1978年）
『暮らしのことばと心』（大月書店，1980年）
『暮らしの京ことば』（朝日新聞社，1979年）
『日本人の名前』（大修館，1979年）
『働く婦人の人間関係』（汐文社，1972年）
『女，人間として——その生き方を考える——』（文研出版，1974年）

過ぎたれど去らぬ日々——わが少女期の日記抄——

1981年6月19日第1刷発行　　定価1200円

著　者© 寿　岳　章　子
発行者　平　　智　享

発行所　〒113 東京都文京区本郷2-11-9　株式会社　大　月　書　店
印刷 三晃印刷
製本 中條製本

電話(営業)813-4651(編集)814-2931 振替 東京3-16387

本書の内容の一部あるいは全部を無断で複写複製（コピー）することは，法律で認められた場合を除き，著作者および出版社の権利の侵害となりますので，その場合にはあらかじめ小社あて許諾を求めてください。

過ぎたれど去らぬ日々

わが少女期の日記抄

寿岳章子●大月書店

国立国会図書館蔵書

この一冊が私にとって最もよき友であらんことを

――新しい日記帳を書く日に――

序

過去はそれをかなぐり捨てて生きることはできない。色々な意味を持ちながら過去は未来を作ってゆく。

私の人生は、とりわけ結婚という変化を持っていないため、非常に平板で一本調子である。両親と私、ある時期までは弟もともに、親子四人の暮らしは、はるか以前の歳月がそのまま繰り出されつづけているようであった。はためにはさながら「幸福家族」の絵のように、私の一家の暮らしぶりは思えたことであろう。また実際、それはたしかに幸福ということばの映像とよく重なるものでもあった。

ということは、やはり私の育った家庭が、まさしくつつましいながら何ものかを紡ぎ出す日々を誠実に送っていたということである。幸福とは、せいいっぱい生きるという条件のもとにおのずとついてまわるいのちの価値のようなものであろう。

愛しあって家庭を築いた私の両親は、長い歳月、結婚当初の思いを持続させた。二人の間に生まれた私は、みずからの人生を創り出してゆくことの意味をおのずと教えられていった。その過程が、たとえば女学校時代の日記の中にあるいは記録されているかもしれない。そしてそれがどういう条件で、どういう形を取ってなされていったかを、この日記抄から汲み取って頂ければしあわせに思う。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

そっくりそのまま残った大部の私の女学校時代の日記を、面白いと言って下さった畏友篤久美子氏、西川祐子氏のことばにすがるように、私は日記の一部の活字化にふみきることにした。とりわけ平和憲法を冒瀆するような事がらがあいついで起こっている今日このごろ、五十年近い昔に、一人の女学生がひそかに平和憲法的な世界を恋していた客観事実も知ってほしいと思った。その祈りにも似た思いが、どんな時代に育っていったかも提起したかった。

幸い、大月書店が私の志に応じてくれた。今、私有の手文庫からとり出されて、ひとさまの目にも触れることになった私の過去の意味を、もう人生のかなりな部分を歩き通した私も、あらためてこの機会に問うて、さらに私の未来に向かって歩みをすすめたい。

この日記の中で若々しく活躍している父母はすっかり老いた。人間の歳月は時として悲しい。とりわけ母は、活字になる私のこの本を見ることももはやかなわず、今は病床に昏昏と臥している。その母を思いながら父は、この本の題と、跋文を私に贈ってくれた。親子の最後の団欒とでも言うべきであろうか。又、五年間の担任の先生方も、今お二方が健在でいらっしゃるが、お三方は既にこの世を去られた。思いは深い。この日記公刊にあたっての多くの方々の有縁無縁のお力ぞえを、今あらためて心から感謝する。

一九八一年五月二十日

なお、日記本文を読んで下さる前に、解説にかえての「日記の時代をかえりみて」をさきにお目通し頂きたい。

目次

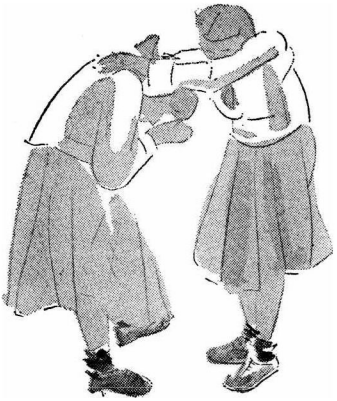
はしがき
一年生　一九三六年四月九日～一九三七年四月七日……七
二年生　一九三七年五月十一日～一九三八年四月四日……四三
三年生　一九三八年四月十六日～一九三九年四月七日……九三
四年生　一九三九年四月十二日～一九四〇年二月二十二日……一三九
五年生　一九四〇年四月九日～一九四一年三月四日……一七九
日記の時代をかえりみて……二
あとがき　寿岳文章

この日記の文章は、あくまでも「抄」である。長い一日の記録のうちからある部分を撰び、又とびとびの日から撰んでいる。今の読者にはわかりにくいかと思われる項目には簡単な注（＊印）をそのたびにつけた。なお漢字の使い方などでは不統一もあったり、漢字に書きすぎのような面も多々あったりする。あるいは逆に漢字を使わずかなで書きなぐったようなことばもあるが、当時の一人の女学生がどの程度の文字づかいをしていたかの記録にもなろうかと思い、敢えてそのままにした。固有名詞などの無知から、時たまるで誤りもあったが、それは訂正した。なお、かなづかいも現代かなづかいに改めた。また、読みやすさを配慮して、一部の漢字にルビを振った。

本文カットは、五年生の折、図画の授業で同級生を描いたものからとった。口絵写真の「ながれ」は、いわば「作品集」である。

一年生

一九三六年四月九日～一九三七年四月七日



入学式

四月九日　木曜日　雨後曇

待ちに待ったうれしい入学式である。四組に組分けしてもらって、美しい講堂*に入る。さんさんと輝く電燈の下で校長先生のお話をききながら、この光輝ある歴史をきずつけぬようにしよう、と固く心に誓った。

式がすみ、方々の教室をみる。何処(どこ)も彼処(かしこ)も驚くばかり。明日からこの美しい教室でたくさんの人々を相手に闘うんだと思うと、身も心も希望に向って飛んでいくような気がする。喜びに満ち満ちながら退出する。

ああ、今日のよき日！

＊京都府立第一高女は私の入学した年に新築がなって、まことに美しく設備が整っていた。農村の小学校からいきなり入学してきた私はただただ驚くばかりであった。

作文「入学の喜び」

四月二十四日　木曜日　晴

今日は第一時間目が綴方であった。此の間の「入学の喜び」というのが、いよいよ結果が知れるのである。

先生がはいって来られる。そうして「此の間のよいのを」と言って、だんだん読み出された。一つ、二つ、三つ、とずんずん読んでいかれる。けれども私のは少しも読まれない。私の胸は、血がさかさに流れるようにガンガン鳴っている。まだよまれない。私はすっかり悲しくなってしまった。「ああ、私は駄目なのかしら」と思うと、何だか心が冷静にな

ったような気がする。と、読まれた、読まれた。「二時五分前を……」と先生の声が聞える。それが私の耳にとても嬉しくひびく。又顔が火照ってくるような気がする。嬉しい。さあ、先生が読み終られた。なんておっしゃるだろうと、私は一心に先生の口もとをみつめた。

「これ上手でしょう」

最初の言葉。ああよかった。私はホッとした。すると早く家に帰って、父母に知らせたくなった。

ああ、よかった。

こわごわ電話をかける

五月一日　金曜日　晴

今日は大変よいお天気で気持がよかった。一時間目の図画はタッチのおけいこ。「腕がよく動きますね」とほめてもらって、大へん嬉しかった。

家へ帰ってから、電話をかけるのと、うどん玉と、ふを買いにいった。電話をかけるのは生れて二度目*なので、ほんとうにこわかった。受話器を耳にあてる。

「何番」と小さな声がする。

「向日町七十四番」

「はい、七十四番ですね」

「ええ」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

しばらくすると、何か向うでブツブツ言っている。
「もしもし、そちらは藤本さんですか」
「ええそうどす、何ぞ用どすか？」
「あのお、今日おたのみしておいた肉、まだ持ってきてくださいませんか」
「あ、そらもうやりましたんどすえ、おおきに」
ガチャリとあっけなく電話を切られてしまった。私はホッとして電話の前を離れた。そして何だかつかれたような気になって外へ出た。きれいな青空が心地よく感じられた。

＊今時の長電話時代のこどもたちから見ると呆れるばかりの状況であろう。当時は電話のある家は金持ということになっていた。私の家にもなかった。我が家に電話がひけたのは戦後大分たってからのことである。当時の電話は今のようなダイヤル式ではなく、ベルをならして電話局の交換を呼び、つないでもらうのである。

田園散歩

五月三日　日曜日　晴

今日は朝からお使いばかり大へんたくさんした。一中の校長先生や森さん、たるみさん等たくさんお客さんがいらっしゃった。

お母さんは大へん喜んでくださった。そして頭をなでてくださった。私より小さなお母さんが大きな私をなでてくださるので、私は何だかテレ臭いような気がした。でも今日は働くことの喜びをつくづく感じたような気がした。

弟の急病

午後からお友達とれんげをつみに行った。幾度か蛇におびやかされながら、青い麦畑の中を通ってれんげの美しくさいているところへ出た。ああ何とよい空気だろう、よい景色だろう。単なる田舎の、一農村の姿にしかすぎないのだけれど、私には美しく美しくみえた。とるにたりないようなところにも、かくされた美というものがあると、私はつくづく感じた。

春のびふうはさやさやと青い青い麦畑の上をわたっていく。そのたびに青い麦の穂はしずかに、しずかに波をつくっていく。痛いほど目にしみる青空には雲雀のさえずりさえ聞える。白い浮雲のフワリフワリと流れていくのも、いかにものどかに感じられる。

黄色い菜の花畑がどこまでも、どこまでもつづいている。その間に緑の麦畑がポツンポツンと置かれてある。れんげの美しく咲いたあぜ道の向うには、農家が五、六軒みえる。牛小屋からは「モォウォ――」といかにものんびりした牛の啼き声が、春の空気に流れていく。まるで絵にかいたような美しさである。何とのびやかな、美しい風景だろう。「やれ名所だ旧跡だ」とさわがれているところよりも、かえってこんなところに純すいの美があるように思われる。

私はのどかな春の空気にひたりながら、いつまでもいつまでも、れんげをつむ手を無心に動かしていた。

五月六日　水曜日　曇後雨

今日くるはずのミシン*の事を楽しく思い浮べながら家に帰ってみると、母は青い顔をしてこの間から小熱を出してふせっている弟のまくらもとにすわって、弟の顔をじっとながめている。私はハッとして、「どうしたの」と聞くと、「きつう熱が上ったの」といかにも心配そうにおっしゃった。「何度？」と私も我しらず上ずった声を出した。「さっきは八度七分だったのよ、今度はどうだろうね」と又目を弟の方にうつされた。私はだまってそこにすわりこんだ。身体の弱い弟、あんたはどうしてこんなにお父さんやお母さんを困らすの、と私は涙の出るような気分になって心の中で叫んだ。しばらくの間のちんもく……。「あきこ、おやつにサンドイッチがおいてあるだろう。あれをお食べね」と力なくおっしゃった。「はい」と私も力なくいって立ち上り、茶の間でうつろな心を抱きながら雨のさびしく降っている庭をぼんやりとながめつつ、パンを口にはこんだ。いつもおいしいおやつも今日はなんだか味がない。ふとその耳に聞えた隣室の声。

「三十九度二分、ああ大分高熱だ。だんだん上っていく。ほんとにどうしたものだろう」とため息の中につぶやく母の声。「とにかく自動車で京都の医者にいこう」と沈みきった父の言葉。しばらくするとカラコロという下駄の音がした。母が自動車の交しょうにでかけたらしい。

「ああそうそう、ミシンが女中部屋にあるよ」と父がいったので、私はちょっと好奇心を抱いて女中部屋をみた。そこには私の長い間あこがれていたミシンが置いてあったけれども私はふっと目をそそいだなり二階へ上って本を開いた……。

下では帰ってきた父の声と母の声がいりまじって聞える。今度の病気で又弟にはお金がいるだろう。私の女学校入学でさんざんお金を使った後だから、私もしっかり心のひもをくくって、倹約するようにしよう。

＊電話と同じく、当時はミシンのない家もそう珍しくはなかった。私の家も、母が洋裁をしないので、ミシンはなかった。女学校へ入ると、洋裁の時間もあってどうしてもミシンがほしい、私はシンガーミシンの、それも電動のを思いきって買ってもらって大喜びだったのである。電動は当時では大そう珍しかった。

皆既日食の観察

六月十九日　金曜日

今日は世界で待ちに待ちこがれた皆既日しょくのある日。おまけに日本であるのだから、私達は嬉しくて嬉しくて堪らない。朝からガラスやノート等を用意して、二時半を待ちこがれる。

やがて放課の鐘と共に、私達は方々に陣取って、一かどの科学者ぶって時計を見ながらノートに筆記する。くもりガラスで見ると、太陽はあかがね色に鈍く光って見え、やはりあかがね色の光が四方八方に散って居る。最初は右下のはしが、ほんのちょっぴり欠けはじめた。五分十分とたつ中にだんだん欠けて来る。けれど地上の暗さは少しも変らない。

三時十分前頃になると、殆んど三日月形になって来た。三時六分になると、もう二分の一以上欠けた。先程まではあんなに眩しく、かつ暑かった光線は、今はただ明るいと言う

程度にすぎない。

最高調の三時半頃になると、大へんうすぐらくなって、教室の中はまるで夕方のようだ。それから太陽はだんだん姿を見せた。日しょくの終りの四時半頃は、太陽は前とかわらぬ眩しい光を私達にさんさんとふりかけている。

家族全員で大掃除

七月二十日　日曜日

目がさめた。雨戸のすき間から太陽が早起きをさいそくする様に、チロチロと光がもれている。

今日は衛生掃除*だ！　うんと働かなくっちゃと思うと、身も心も思わず引きしまってふとんをけとばしてはね起きる。

両親もとっくに起きて、新聞を整えたり、箒の数を調べたり、何かと用意に忙しい。時計を見るとまだ六時。軽い朝食をとり、弟を学校に送り出すと、いよいよ掃除。まだ女中が来ないので、父母とも頭には手拭をかけ、母はたすき姿で甲斐甲斐しく、父は父で上半身をはだかにして、汗をふくためのタオルを背にかけている。まるで原始人みたいなかっこうに思わず吹き出しながら、二階へ上って私の本棚の荷をすっかり運び去った。其の中に頼んで置いた植木屋さんが来る。さあ！　いよいよ。母が、

「朝の中は手伝って貰うようなことはないからおとなしくしていらっしゃい。」

と言ったので、内心不満を抱きながら渋々表へ出た。門柱にもたれかかって見るともなし

にぼんやり石垣を見つめていると、とかげがチョロチョロ走り出た。
おや、と思っていると、七月の日光に背の毒々しい色をキラキラ光らせながら、生垣の中にはいって行った。とかげも今日は忙しいのかしら。そんなことを考えながら、暫時ポカンとしていたが又二階に上って、荷物の置かれてある弟の部屋で古い日誌等を読んで時を過ごす。十二時前になったので昼食。
「さあいよいよ章子にも働いて貰うよ」
と母が姉さんかぶりの下から言った。
皆一所懸命に心を合して、畳を入れたり、床に新聞をしいたりしたので、最早畳をふけばよいと言う段取りまで進んで行った。冷い水で雑きんをゆすいでキュッキュッと音をたててふくと、忽ち白い雑きんはうすく汚れて来る。そんなにして二へんふくと、畳はサラサラとして来て手ざわりも快い。十の部屋を拭き終るともうホッとした。調度品をすっかりもとの場所に置いて、皆ニコニコした顔で真赤な西瓜をかこんだ時はほんとうに嬉しかった。
「今年は三人半でやったのに、ほんとに早く片づいたね」
「ほんとにね、それに章子も大分助けてくれたし、ほんとに大助かりだった」
「そらもう、何ちゅうても、女学校の一年生やもの、こんなことあたりまえやわ」
等と楽しい会話を交わしつつ、ほおばった西瓜のおいしかった事。
今日はほんとに嬉しい。きちんとなった部屋に坐っていると、心までせいせいして来る。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.